



筑紫女学園大学リポジト

日本における郭沫若の遺跡の一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/400

日本における郭沫若の遺跡の一考察

崔 淑 芬

A Study of Guomoru's Historical Remains in Japan

Shufen CUI

はじめに

郭沫若は（かくまつじゃく）（1892年1月16日～1978年6月12日）中国の現代文学者・歴史学者・古文研究者で、國務院副総理・科学院院長・全国文学芸術連合会主席・全人代常務副委員長・中日友好協会名誉会長などを歴任した政治家・社会活動家である。

郭沫若は四川省楽山県沙湾鎮の地主兼商人の家庭出身である。本名を開貞（かいてい）、幼名を文豹、号は尚武・沫若、筆名を麦克昂・鼎堂（ていどう）などという。詩人・劇作家・考古学者・歴史学者・書家。また革命政治家として多彩な活躍をし、数奇な生涯を送った。彼の研究は、歴史文学から哲学、甲骨文や古文字の解釈等幅広く各分野に及び、作品を数多く残した。

郭沫若が豊富な自然科学と社会科学の知識を身に付けたのは、日本での二十年間に及ぶ生活と密接な関係がある。そのうちの前半十年間、すなわち1914年1月から1923年4月までを一高特設予科、岡山の第六高等学校を経て、九州帝国大学医学部で留学生生活を送った。二十三歳から三十二歳までであった。後半の十年間は、1928年2月から1937年7月まで、千葉県市川市須和田で政治亡命生活を送りながら、中国古代史の研究、文学創作に心血を注いだ。この二十年間の日本での生活が彼の後半の人生、社会的地位の基礎を定めた¹⁾。そして、生活の貧困、深い挫折感など異国での不遇な生活を余儀なくされたことが、学者としての強い孤高の精神、自尊心の反面である敏感で猜疑心が強いなどの欠点の形成にも一役買ったのである。それは郭沫若の晩年に大きな影響を与えた。例えば、1966年、文化大革命が始まる直前、七十四歳の郭沫若は政治の嵐を感じ、恐れて中国科学院の職務を辞退するとともに、自分の事業・研究に対して「私が以前書いたものは少しの価値もない。すべて焼却してほしい」と自己の全面否定につながる自己批判の異常な行

動に出た。毛沢東に対し、崇拜から恐れに態度が変わり、悲喜劇的な晩年を送ったといえよう²⁾。

ここでは郭沫若の代表的なモニュメントを取り上げ、彼の人生を振り返ってみたい。

一 後楽園詩碑

後楽園仍在	後楽園なおあれど
烏城不可尋	烏城（うじょう、岡山城の異称）は尋ぬべからず
願将丹頂鶴	願わくば丹頂鶴をはなちて
作对立梅林	対を作して梅林に配せん

1955年冬重遊岡山後楽園賦此志感

この五言絶句は、1955年12月15日、中国社会科学院院長郭沫若が、中国学術代表団長として来日、かつて日本留学中に学んだ旧制第六高等学校を思い出して揮毫したもので、1961年それを「詩碑建設委員会」が詩碑にしたのである。現在岡山後楽園に碑文として残されている。

郭沫若は岡山を三十八年ぶりに訪れ、学生時代の通学路であった後楽園などを訪問した際、当時の岡山知事三木行治に「鶴がいないのは寂しいから贈りましょう」と言い、翌1956年7月1日、二羽の丹頂鶴をプレゼントしている³⁾。

郭沫若は1914年、長兄の援助で日本に留学した。当時、官費・公費と私費の三種類の留学生制度があった。官費の学校は第一高等学校・高等師範学校・東京高等工業学校・千葉医学専門学校・山口高等商業学校の五校しかなかった。

官費の出費は、日本が庚子（こうし）賠償金（1901年、連合軍との北京議定書、いわゆる辛丑条約が成立したために清政府が払う賠償金）の一部を利用して、中国人の留学生を援助するということである。公費は、その留学生を派遣した中国の地方政府が負担する。『一高六十年史』によれば1907年、清政府公使李家駒（りかく）が日本の文部省と交渉し、契約を定めた。それによれば、「明治四十一年以降、十五年間、毎年第一高等学校六十五名、高等師範学校二十五名、東京高等工業学校四十名、山口高等商業学校二十五名、千葉医学専門学校十名、合計百六十五名ノ清国留学生ノ入学ヲ許可ス。清国ハソノ為、学生一名ニ対シ二百圓乃至二百五十圓ノ割合ニテ、（公使館ノ手ヲ経テ）当該学校ニソノ教育費ヲ納ム。……」と明記されている。

郭沫若は最初、東京神田の日本語学校で勉強し、目標は官費学校に入ることであった。彼は家族への手紙の中で「日本に留学する目的は、実業と医学を学ぶことである。……これから東京の四校、すなわち師範、高等工業学校、千葉医学専門学校、第一高等学校の入学試験を受けるつもりだ。この四校は官費の学校であるので、生活が保証される。しかし師範学校には入りたくない。残り三校のうち、もし高等工業学校或いは千葉医学専門学校に合格すれば、三年後卒業して帰国できるが、第一高等学校に入れば卒業後は帝大に進学したい。そうすれば七年後帰国できる……」と、留学の目的と希望を述べている。この郭沫若の希望も当時の留学生の一種の流行でもあった。千人近い受験者の中で、彼は第一高等学校予科に合格、官費留学生の資格を得た。

1915年夏、三番目の成績で一高予科を卒業、岡山の第六高等学校医学科に推薦された。三年間

の六高等学校の学習で、郭沫若が一番苦労したのはドイツ語、英語とラテン語三つの外国語で、三年後の成績は、ドイツ語平均七十五点、英語九十三点、ラテン語は七十七点であった。郭沫若のドイツ語の先生、藤森成吉はこう語った。「当時の郭さんは目立たない地味な生徒だった。日本語も講義を聞くには困らない程度で、話すことは不自由であつたらしい。おまけに、以前に大きな病気でもしたことがあるのか、耳が少し遠かった。私は、後の席でいつも静かに講義を聞いている郭さんに『前へ出て座りなさい』と言った」。1915年の第六高等学校時代に、郭沫若は、東京京橋病院看護婦の佐藤とみと出会い、1916年、岡山で佐藤とみと結婚した。⁴⁾

1918年、郭沫若は九州帝大医学部に入学した。百四名の新入生の中に中国の留学生は五名しかいなかった。郭沫若は、その中の一人だった。

九州帝国大学医学部に在学した中国留学生数一覧

年	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923
入学数	2	2	4	2	1	5	5	2	4	1	3
卒業数	0	0	0	0	2	2	4	2	0	3	7

沈殿成等『中国人留学日本百年史』により作成

上表から見れば、1913年から1923年までの十年間、中国人の入学者は合計三十一名、卒業者は二十名であったが、1913年から1916年まではゼロであった。郭沫若が在学したのは1918年9月から1923年3月、つまり卒業まで四年六ヵ月かかった。その原因は、当時の九州帝大の学制が変わったことによる。つまり、九月入学が四月入学に変わったからである。

二 佐賀熊野川の「郭沫若先生記念碑」

九州帝国大学医学部の勉強の科目は三十二である。第一、二年次は医学基礎知識、つまり医化学・生理学・解剖学・組織学・病理学・薬物学・治療学・胎生学・外科・細菌学などの科目になっている。三年、四年次は病理学・外科・内科・小児科・婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・歯科・法医学・精神病学・整形科・皮膚病・衛生学及び臨床実習などとなっている。郭沫若は十七歳のときにチフスに罹り、耳の病気になってしまった。教室ではいつも前に座り、一生懸命授業を聞いたがそれでも時々聞こえない。とにかく先生の板書をすべて書き写し、復習をし、大変な苦労をした。しかし聴診器を使う臨床実習のときには、耳の遠い郭沫若はどうしようもない窮地に陥る。帰宅後、聴診器を自分の胸に当て、繰り返し聞いてみるが効果がない。のっぴきならぬ境地に陥った郭沫若は、初めて自分が選んだ医学の道が誤りであったのではないかと疑う。数年の努力は一体何であったのか？ と、自身が敗北に追い込まれたように感じたのである。この苦痛の日々の中で、1923年3月、彼は七名の留学生卒業生名簿の中に入る。卒業証書と医学士の合格証書を受け取った郭沫若は、どのような心境であつたらうか。四年余りの医学勉強は、彼が他の同級生よ

り何倍も努力と辛酸をなめ尽くした結果であり、その嬉しさは本人しか分からないものであったろう。しかし耳が遠いという無情な現実の前に、結局彼は医学の道を断念し、文学・歴史・古文字の道へと転じた。もともと彼は文学の才能も併せ持っていたのである。⁵⁾

彼は九州帝大在学中、文学に夢中になり、21年処女作である『女神』という詩集を世に問い、文学者としての第一歩を踏み出すことになった。しかし1924年、九州帝大研究院への官費留学の申請が許可されなかったため、一家の生活は窮地に陥り、郭沫若は帰国を決める。

その帰国前、妻安娜（佐藤とみ）・長男和夫・次男博士・三男仏生の一家五人は佐賀県富士町の熊の川温泉を訪れている。熊の川温泉は、その昔、空海が全国行脚の途中に発見したのが始まりと伝えられ、近くは佐賀鍋島藩の湯治場としてにぎわった。郭沫若一家の滞在期間は9月30日から11月半ばにかけてであった。新屋旅館に暫く滞在したが、80年も前のことなので当時を知る人はいなかった。応対に出た宿の人の話では、郭沫若は新屋旅館には家族5人で1週間泊まったが、部屋代が高いからと近くにある自炊民宿である斎藤氏の二階を間借りしそこに移り執筆を続けた。今はその農家も無く、新屋旅館も全面改装していた。

このことは、熊の川温泉町の観光案内に「中国現代文学者、郭沫若は1924年10月この地に滞在した」と記されている。この民家跡地に、富士町や佐賀地区日中友好協会などでつくる「郭沫若と熊の川温泉を考える会」が県内外の多くの団体や個人から募った浄財によって、中国建国五十周年にちなんで建てた案内板がある。また溪流沿いには郭沫若先生記念碑を建てて、中日友好に尽された功績と人徳を賛えている。1982年10月9日に除幕式を行い、郭沫若の孫の郭昂（かくこう）（東京工業大学大学院終了後、東京の大手民間シンクタンクに勤め、横浜在住）も参加した。記念碑には郭沫若の略歴と自伝小説『行路難』の一節が刻まれている。

1924年11月中旬、中国に帰った。十年間の留學生活の幕は閉じられたのである。

三 金印公園の「永久に戈（ほこ）を操（と）るを願わず」詩碑

中日国交回復三周年の75年9月29日、福岡市志賀島の金印公園に建てられた郭沫若筆の詩碑は、「永久に戈を操るを願わず」と結ばれている。

郭沫若は九州帝国大学医学部に留学している間、金印の出土した志賀島を見学、遙かな日中文化の歴史に想いを馳せている。詩人・文学者としての第一歩をここで踏み出したのである。

1955年12月、郭沫若は日本学術会議の招請に応じて日本を訪問した。代表団の構成は、北京大



郭沫若先生記念碑
於：佐賀・熊の川

学教授で中国科学院社会科学研究院の哲学社会科学部委員の翦伯贊（せんはくさん）、中国科学院物理学数学化学部委員で上海復旦大学教授の蘇步青（そほせい）、鉄道研究所所長で中国科学院技術科学部副主任の茅以昇（ぼういしょう）、広州中山大学副学長の馮乃超（ふうだいちょう）、水利部設計院技師長で中国科学院技術科学部委員の汪胡楨（おうこてい）、および中国科学院生理生化学研究所所長



金印公園
於：福岡市東区志賀島字古戸1865

馮徳培（ふうとくばい）・北京医学院薬学学部部長薛愚（せつぐ）・中国科学院考古研究所副所長尹達（いんたつ）・中国科学院金属研究所研究員葛庭燧（かつていすい）・中国科学院歴史研究所研究員熊復（ゆうふく）などである。これらのメンバーを見ると、哲学・教育・歴史・数学・橋梁工学・水利工学・生理学・物理・考古などの分野に及んでいる。その学術団長として郭沫若は、中日の文化・科学の交流を行なったわけである。⁶⁾

金印公園の詩は、その視察の間の12月22日、華僑代表の一人である甘文芳が、郭沫若らの訪日は重大な意味を持っているという賞賛の詩を書き、福岡で郭沫若に渡した。それを讀んだ郭沫若は、それに和した一篇の詩を書いたのである。

1972年の中日国交樹立の際、九州地域の同志たちは、郭沫若の詩碑をつくろうと呼びかけた。二年後の1974年冬、日中友好協会の副会長吉田法晴は中国訪問中、詩碑をつくるため、郭沫若が十八年余り前の訪日の際に書いた詩を改めて書いてもらった。翌1975年9月29日、「詩碑」は完成し、志賀島金印公園の東側に建てられた。この金印公園は志賀島の南西部に位置し、この金印のことは西暦57年、後漢の光武帝が当時の日本の奴国王に贈ったもので、「光武中元二年、倭の奴国、奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜うに印綬を以てす」と『後漢書・東夷倭人伝』のなかに記されている、有名な「漢委奴国王」（漢の委の奴の国王）の金印が出土した場所である。1784年2月28日、百姓甚兵衛が水田の溝を修理しているときに発見したと伝えられている。1922年、「漢委奴国王金印発光之处」の石碑が建立され、金印を記念する公園ができた。この二千年に亘る中日交流の歴史の第一ページが開かれた場所に、今日の郭沫若の「詩碑」が建てられたことは、時空を超えた、一衣帯水の両国交流が続いていることを示している。

詩碑の高さ1.7メートル、幅は2メートルに近い。右側が詩の原文、左側が日本語の訳文になっている。

戦後頻傳友誼歌 北京聲浪倒銀河
海山雲霧崇朝集 市井霓虹入夜多
懷舊幸堅交似石 逢人但見咲生窩
此來收穫將何似 永不重操室内戈

一九五五年冬訪問日本歸途在福岡作轉瞬已十八年矣
一九七四年冬 郭沫若

戦後頻（しき）りに伝（つと）う友誼（ゆうぎ）の歌、
北京の声浪（うたごえ）は銀河を倒（さかしま）にす
海山（かいざん）の雲霧（うんむ）は崇朝（あさのま）に
集まり

市井（しせい）の霓虹（ネオン）は夜に入りて多し
旧（いにしえ）を懷（おも）えば堅（かた）からんことを
幸（ねが）う交わり石の如（ごと）く

人に逢あえば但（ただ）見る咲（わら）いて窩（えくぼ）を生ずるを
此來（このたび）收穫は將（は）た何似（いかん）

永（とこ）しえに重ねて室内（きょうだい）の戈（ほこ）を操（と）らじ

一九五五年の冬 日本を訪問し歸途福岡に在りて作る
轉瞬（またた）くまに已（すで）に十八年なり
一九七四年冬 郭沫若



「永久に戈を操るを願わず」詩碑
於：福岡志賀島金印公園

この「永久に戈を操るを願わず」という詩は、中日両国国民の共通の願いである。永遠に人々の心に残るであろう。

四 郭沫若の旧居と「さらば須和田よ」詩碑

郭沫若の旧居は何カ所もあったが、市川市須和田2-3-14はその一カ所であった。

前述したように、郭沫若は九州帝大医学部を卒業後帰国、1926年広州の中山大学文学院長となり、間もなく北伐に参加した。蒋介石の反共政策に反対し、「今日の蒋介石の真像」という反蒋文章を公開した。その後、周恩来の紹介で共産党に入党、徹底的に革命者になったため、蒋介石政権に追われ、1928年2月、内山書店主・内山完造の助力で、香港・上海を經由して妻の郷里である日本に亡命、上海当時の知人、作家村松梢風の紹介で市川に居を定めた。はじめは、村松の知人横田家の近くに住んでいたが、警視庁に三日間も拘留されて厳しい尋問を受けたこともあって、他に累が及ぶのを恐れて、須和田六所神社わきの小道を入ったところで一軒の素朴な家を建て越した。ここで警官や憲兵の絶え間ない監視を受けながら、10年5ヶ月の亡命生活を送ったが、この苦しい亡命生活のなかで甲骨文、金石文の研究に没頭した。それらの研究を通じて中国古代社会の研究を深め、『中国古代社会研究』、『甲骨文字研究』、『两周金文辞大系考釈』などを著し、



郭沫若の旧居
於：千葉県市川市須和田2 - 3 - 14



1945年頃の佐藤とみ（郭安娜）

中国古代史研究に大きな業績を残した。

「日本に亡命した時の郭沫若」の写真で1929年11月24日、郁達夫が郭沫若に会うため来日したときのものである。中国文学研究会が、郭沫若と郁達夫歓迎の会を開き、記念として撮ったものである。前列左から、吉村永吉・石田幹之雄・郁達夫・竹内好・郭沫若・武田泰淳。中列左から、土居治・飯塚朗・郭明昆・さねとう・千田九一・曹欽源。後列左から、増田渉・一戸務・松枝茂夫など学者がいた。⁷⁾

市川市須和田で彼は日本官憲の監視を受け、半幽閉的な生活を送った。1937年7月7日、盧溝橋事件が勃発、家族を置いて一人で帰国するまで、十年間須和田で過ごしたのである。この間彼は、史学・考古・文学に没頭し、多数の研究結果を発表した。代表作は『甲骨文字研究』・『殷周青銅器銘文研究』・『両周金文辞体等考釈』・『卜辞通纂』と『中国古代社会形式』など、おびただしい作品を書いた。文学において有名なのは『創造十年』・『私の幼年』など自伝体著作である。

1955年12月5日、郭沫若は訪日の間に十八年ぶりに市川市須和田の旧宅を訪ねた。南向きの典型的な日本式一軒家である。旧居を見て、彼は懐旧の情を催した。六十三歳になっていた郭沫若は低い柵をなでて、十八年前に分かれた元の妻安娜や五人の子供たちのことを思い出していた。

安娜の原名は佐藤とみ。1916年夏、友人を郭沫若が見舞ったとき、病院（京橋区の聖路加病院）に勤めていた仙台出身の安娜と知り合い、同年の年末、二人は一緒に生活するようになった。夫の郭沫若および子供のため、彼女はあらゆる辛苦をなめ尽くした。1937年7月25日、郭沫若の帰国後、日本に残った彼女は一人で五人の子供を育て上げたのである。⁸⁾ 郭沫若はそれらの過ぎし日を偲んで、一篇の中国への『帰国雑吟』を書いた。

又当投筆請纓時	又、まさに筆を投じて従軍の時
別婦抛雛断藕糸	妻や子との恩愛を断つ
去国十年余泪血	故国を去りて十年、血涙を余（のこ）し
登舟三宿見旗旗	舟に三泊、祖国の旗旗を見る

そして旧居の地を再び訪れ、万感胸に迫るものがあつたのであろう。

十八年後重来此	十八年ぶりに再びこの地を訪れ
手栽花木已成蔭	手植えの花木もすでに蔭をなす

と、久しぶりに旧居を訪れた郭沫若は昂ぶつた心情を吐露している。

筆者は郭沫若が住んだ千葉県市川市の旧地を訪ねた。事前に市川市役所に連絡したが、旧居の管理は大家である田中隆三氏がしているというので、直接に田中氏を訪ねた。郭沫若旧居は田中氏の自宅から四、五分歩いたところにあり、記念館となっているであろうと想像していたが、予想に反して、入口が閉まっている。田中氏が扉のキーを開け、やや細い道を行った裏手に旧居があつた。「郭沫若先生旧宅」の立て札もなくなり、庭に雑草が繁茂し、建物もみすばらしい。田中氏によると、昭和31年、妻とみの渡中により、現所有者に売却。以降、民間人に賃貸されていたが、昭和54年3月から、旧宅の保存を目的として市が借り受けることになった。その間、郭沫若の四男郭志鴻（しこう・音楽家）氏が仮住まいしたこともあつたが、平成11年3月をもって借り受けを解約した。老朽化が進んでいる状態で、どうすればよいか分からないとのことであつた。筆者の気持ちは重苦しかった。まさに、僅かしか残っていないメモリアルが、歳月とともに闇の中へ消え去ってしまうのかと思われた。

田中隆三氏は郭沫若と郭安娜（佐藤）のこと、郭沫若旧居の管理の問題などを話してくれた。また、郭安娜が書いた手紙を見せて撮影をさせて下さつた。

佐藤は1949年、大連に永住、郭安娜という名前で中国籍を取つた。

1994年8月15日、上海で病逝、享年百一。

郭沫若旧居の近くに「須和田公園」がある。中には郭沫若の詩碑が建っている。これは1966年、市川市が郭沫若の来訪を記念して建てたもの。この碑には、郭沫若が1955年に作った五言の「別須和田」という長詩が刻まれている。1973年6月10日、除幕式が行なわれた。詩碑は黒の御影石で作られ、幅2メートル、高さ1.5メートル。正面には郭沫若の自筆の詩、右側に郭沫若の半身レリーフがはめ込まれている。詩碑の内容は以下の通りである。

草木有今昔 人情無変遷
 我来遊故宅 隣舎尽騰歎
 一叟携硯至 道余舊所鐫
 銘有奇文字 俯思始恍然
 “后此一百年 四倍秦漢磚”
 叟言“家之宝 子孫将永伝”
 主人享我茶 默默意未宣

相對察眉宇 舊余在我前
 憶昔居此時 時登屋後山
 長松蔭古木 孤影為流連
 故国正塗炭 生民如倒懸
 自疑歸不得 或将葬此間
 一終天地改 我如新少年
 寄語賢主人 奮起莫俄延
 中華有先例 反帝貴持堅
 苟能團結固 驅除並不難
 再來慶解放 別矣須和田



「別須和田」詩碑
於：市川市「須和田公園」

一九五五年冬重訪日本時所作轉瞬又九年矣
 一九六四年七月十三日晨 郭沫若

(訳文)

「さらば 須和田よ」
 草木に今昔あり 人情に變遷なし
 我來りて故宅に遊ぶ 隣舎は騰歡を尽す
 一叟(そう) 硯を携えて至り 余の旧鏝
 (もとほ) るところと道う
 銘に奇(く)しき文字あり、俯思 始めて
 恍然(こうぜん)、

「これより一百年の後、秦漢の磚(せん)に四倍せん」
 叟曰く「家の宝として 子孫將に永く伝えん」と
 主人 われに茶を享し 黙々して意未だ宣べず
 相對して 眉宇に察す 旧余われの前にうかぶ
 憶(おも)う昔 ここに居る時、時に屋後の山に登る
 長松は古屋を蔭(おお)い、孤影 流連をなす
 故国正に塗炭 生民 倒懸せらるるが如し
 自ら疑う 歸ること得ず 或は將に此の間(ところ)に葬られんかと
 一終 天地改まり われ新少年の如し
 語を寄す 賢主人よ、奮起して俄延(のば)すことなかれ
 中華に先例あり 反帝は持すること堅きを貴とぶ
 苟くも能く団(かたま)り能く固まらば、驅除する 並(まつた)く難からず、
 再び來りて解放を慶せん さらば 須和田よ。



「別須和田」五言長詩

右は乃(すなわ)ち一九五五年冬重ねて日本を訪うの時作所、轉瞬また九年
 一九六四年七月十三日晨 郭沫若

碑には「昭和三十年冬、中国学術文化視察団の団長として訪日した折、郭沫若が須和田の旧居を久しぶりに訪れた際の感慨を、格調高い長詩で歌いあげたもの」と刻まれている。

郭沫若は今昔の感に感慨無量の心情で「別須和田詩」を書いたのであった。⁹⁾

1955年の訪日は、郭沫若にとって十八年前に別れた旧居への再遊でもあり、最後の訪問でもあった。彼は中日平和条約が締結される二ヵ月前の1978年6月12日、八十六歳で死去した。市川市は郭沫若の縁によって、1981年、四川省楽山市と友好都市条約を結んだ。

1996年、市川市楽山市友好都市締結15周年を記念して、市川市長と楽山市長の連名による記念碑が、須和田公園内の「別須和田」詩碑の近くに建立された。

「市川市と楽山市は世界の平和と国際親善を希求し、友好都市の盟約を結び、今日まで十五年の歩みを進めてきた両市民の新たなる『平和』の願いをここに記す 市川市長 高橋國雄」

「沫水若水江戸の波濤に連なる 文豪その偉大なる筆を以って中日の山川を描き 牡丹桜ともに園内春色に染め 人民の真心友好の詩歌を奏でる 楽山市長 劉」

取材中、旧居の土地地主田中隆三氏からお聞きしたところでは、市川市は郭沫若の旧宅を保存するため、その近くにある公有地の真間五丁目須和田公園あたりに旧居を原型のまま再建し、記念館として展示する計画であるという。

郭沫若の旧宅建物は老朽化が激しく、市川市としてはこの歴史的に由緒ある旧宅をそのまま放置することは好ましくなく、市として積極的に、できるだけ多くの旧材料を使用し、移築・復元を図っており、着工は2004年5月中旬以後、竣工は9月中旬、館のオープンは10月中旬を予定しているという。

2004年8月中に、市川市（千葉県）は市制施行七十周年を記念して、郭沫若旧宅を真間五丁目三番真間五丁目公園内に移築・復元し、「市川市郭沫若記念館」の落成記念式典は行われた。参列者の中には、郭家の親族の他、市川市役所の関係者、県・市会議員、中国大使館の一等書記官及び郭沫若の故郷乐山から来た政府代表団の一行、合わせて七十人ほどいたそうである。

9月16日、「市川市郭沫若記念館」として公開した。記念館の所在地真間五丁目公園は、郭沫



郭沫若記念館
於：市川市真間5-3-19

若旧居から裏手の坂道を辿り、須和田台地の頂上にある須和田公園を抜けた所にある。復元された郭沫若記念館は規模、設計、デザインは元の旧居と同じようにしているという。

「市川市郭沫若記念館」の説明文の中には「郭沫若氏は、市川市と中国・楽山市との友好都市締結に多くの功績を残し、昭和3年から約10年間に渡り須和田に住んでいました。記念館は、旧宅を市制施行70周年を機に真間5丁目公園に移築・復元したもので、市川市と楽山市の友好の証でもあります。」と記載されている。

終わりに

2008年3月8日、九州大医学部に学んだ中国の詩人・政治家の郭沫若顕彰碑が福岡市東区馬出の九州大学医学部図書館の前に完成し、除幕式が行われた。医学部の1958年卒業生でつくる同窓会「燦々（さんさん）会」が卒業50周年を記念して建てた。郭沫若の孫で国士舘大学文学部教授の藤田梨那さんとともに完成を祝った。

顕彰碑は高さ2メートル、幅60センチで、郭沫若の写真と業績を刻む。除幕式には燦々会のメンバーら約40人が参加。碑の撰文を執筆した日本郭沫若研究会会長の九州大学名誉教授、岩佐昌が「郭沫若の業績を記念したものが初めて九大につくられ、大変な意義がある」とあいさつし、55年来日した郭沫若の講演を在学中に聴いたという村山世話人は「留学生が多い九大に碑が完成したことは意義がある。アジアの国々との友好の一助になれば」と話していた。

この郭沫若顕彰碑を仰ぎ見ながら、新たな中日交流時代がやって来たような気がして、筆者には感無量の思いがある。



郭沫若顕彰碑
於：九州大学医学部

参考文献

- 1) 『郭沫若全集・文学編』第四卷 人民文学出版社 1984年
- 2) 劉徳有 『随郭沫若戦後訪日』遼寧人民出版社 1988年
- 3) 『郭沫若研究月報』第8号「郭沫若研究者代表団訪日」文化芸術出版社
- 4) 鄭舎農 『郭沫若・安娜』北京中国青年出版社 1995年
- 5) 郭沫若「我的学生時代」桂村『野草』月刊 第4卷第3期 1942年
- 6) 劉徳有 『郭沫若・日本の旅』村山 孚 訳 サイマル出版会
- 7) 殷塵 『郭沫若日本脱出記』実藤恵秀訳 第一書房 1979年
- 8) 鄭舎農 『郭沫若・安娜』北京中国青年出版社 1995年
- 9) 郭沫若「序我的詩」重慶『中外春秋』月刊 1944年

(さい しゅくふん：アジア文化学科 教授)